〔伊勢物語下〕むかし男有けり、その男いせの國にかりのつかひにいきけるに、○中略女がたより出す盃のうらに、歌を書て出したり、取てみれば、

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば、とかきてすへはなし、その盃のうらに、つゐ松のすみして歌のするを書つぐ、

又あふさかの關はこへなん、とて明ればをはりの國へこえにけり、

〔古今著聞集三政道忠臣〕村上御時、南殿出御ありけるに、諸司の下部の年たけたるが、南階の邊に候けるをめして、當時の政道をば、世にはいかゞ申すと御尋有げれば、目出度候とこそ申候へ、但主殿寮に松明多く入候、率分堂に草候と奏たりければ、御門大きにはぢおぼしめしてけり、

〔枕草子四〕ありがたきもの

りんじのまつりのでうがくなどはいみじうおかし、とのもりの官人などの、ながき松をたかくともして、くびはひき入てゆけば、さきはさしつけつばかりなるに、○下略

〔枕草子九〕いとくらやみなるに、さきにともしたる松の煙のかの、車にかゝれるもいとおかし、

〔日本紀略十四後一條〕長元九年正月二日辛巳、今夜藏人頭左近衛中將俊家朝臣隨身、毆損藏人頭左中辨經輔朝臣隨身、先以弓打肩、次雜色以續松打之、

〔續古事談二臣節〕宇治殿臨時客ニ、堀川右大臣尊者ニテ、コトハテゝイデラレケルトキ、兼賴、俊家、能長、基平ミナ子孫ナリ、上達部ニテイデラレケレバ、マツヲトリテ前行セラレケリ、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年八月四日戊子、戌刻將軍家○藤原賴經若宮大路新造御所御移徙也、自武州御亭渡御、御帶御束御乘車、○中略備中左近大夫、美作前司等取松明、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年六月七日庚午、鎌倉中民居、每人用意續松、若夜討殺害人等出來之時者、就聲面々取松明、可奔出之由、被觸仰于保々、清左衛門尉、萬年九郎兵衛尉等奉行之、